

# 帰り道でのトム

ある日、学校が終わり、またトムはゆっくりと帰っていました。帰り道、学校を出ていくつかの角を曲がると原っぱがありました。その原っぱは、今みなさんが想像したような青々とした原っぱではなく、手入れはされておらず、ところどころかたい土が顔を出しています。さびた立ち入り禁止のかんばんが、くにやっとながって、しげみに埋もれています。フェンスもサビが酷く、かわききった焦げた麺のように固まっているのです。

きっと、子どもたちのかっこうのあそび場になるような場所ですが、その原っぱの周りにはたくさん家があり、大人たちが見張っています。なにせ『しんがっこう』ですから、みんなは学校が終わってもあそび時間はありません。それぞれの家では、親たちがどうやったら『良い大学』『良い会社』の席に座れるかのさくせんを考えています。そして、ほとんどすべての親たちの出す答えは、『あそび時間は少なくして、べんきょうの時間をふやす』と言うさくせんでした。

その原っぱにトムが差しかかったとき、ある物音に気がつきました。原っぱの方でガサガサと音が鳴っていたのです。トムは原っぱに足を踏み入れることなく、道のすみっこでなんだろうと考えました。よく見ると、手入れされず伸びほうだいになったしげみの中で、小さな二本の足とくつが、ぴょんと出ていました。きれいにはいていたんだらうなと思える、上等な学校指定の革くつには、初めて付けたとすぐ分かる土が付いていて、ピカピカのくつと少しどろっとした土のミスマッチがいんしょうてきでした。

ぼんやりその足とくつをながめていると、ガサツと音がしました。いっしゅん足とくつが茂みに消えて、同時に男の子がしげみからぴよこつと顔を出しました。トムと同じクラスのネ口です。ひざと手のひらには、くつに付いていたものと同じ、少しどろっとした土が付いています。他のところには土は付いていませんでした。出来るかぎり汚さないように気をつけたのでしょう。そして目線を少し上に上げると、その少しどろっとした土よりも、ずっとどろっとしたような、不安ときょうふがぬりたくられたようなネ口の顔がそこにありました。

トムは遠めのまま、ぼんやりネ口をながめていました。ネ口はそのどろっと顔を上げると、すぐにトムの存在に気付きました。

「やあ、トムじゃないか」

トムはいきなり話しかけられたので、自分に話しかけられていると気付くのに20秒ほどかかりました。そして、「やあ」と返事をしました。

「聞いてくれよ、トム。困ったことになったんだ。実は今日、じゅくがいやでしようがなくなつてさ、それでじゅくをサボつてこの原っぱであそんでたんだ。じゅくが終わる時間に合わせてそろそろ帰ろうとしたんだけど、さっきまでクルクル回してあそんでいたペンがなくなっていたんだ。そのペンは、もっとせいせきが良くなるようにと、お父さんとお母さんに買ってもらった立派なペンなんだ。あのペンをなくしたなんて言ったら、どんなに怒られるか、想像しただけで、こわくて仕方ないんだ」

ネ口は続けました。「なあ、暗くなる前に一緒に探してくれないか？」

トムは、30秒ほど考えて「いいよ」って言いました。

二人はネ口が原っぱであそんでいた場所を探しました。ネ口は必死になって探して、トムははいねいに探しました。トムの場合は遅いだけで、実際にははいねい探していたわけではなかったのですが。

みなさんも大切なものをなくしたことがありますよね？ どんな気持ちだったでしょうか？ まるで信じられないようなことが起きた気分で、夢であってほしいと一度は目をこすったりしたのではないでしょうか？ 後悔するけど、何に後悔したら良いかも分からないまま途方に暮れるのです。

今のネ口はまさにそれでした。探し始めた時にはすでに、日がかたむぎ始めていたので、一時間もしないうちに、影はのび、空はさみしさを混ぜたオレンジ色に染まりました。もくもくと探す二人からはガサガサと言う音しかしなかったのですが、少しずつ鼻水をすすするような音が混ざり、ついに押し込めてうめくような、すすり泣きの声が原っぱに小さくひびきました。

「もう見つかりっこないや。お父さんとお母さんにこっぴどく叱られる」  
ついにネ口の探す手は止まってしまいました。

トムも探す手を止め、ゆっくりと考えました。そして、ネ口がひとしきり泣いて、ちょっと泣きあきた頃、ネ口に聞きました。

「どうしてペンをなくすと怒られるの？」  
ネ口は呆れたような顔をして言いました。「そりゃあそうさ。そのペンは立派でとても高いんだ。だから大事なペンなんだ。それをなくしたんだから、お父さんとお母さんはきつとすぐく怒るよ」

またトムは考えて、三十秒ほどたった頃、もう一度ネ口に尋ねました。

「ペンをなくしたのはざんねんだね。でも、他のペンを使ったらいいんじゃないかな」

ネロはすぐに言いました。「他のペンだって持ってるけど、あのペンは高いんだ。だからお父さんとお母さんは怒るんだ」

ふしぎな顔をしてトムは止まっていました。「トムには分からないだろうな」とネロが続けて言っても、トムは動きません。そして一分はたった頃、トムは言いました。

「ネロが今日、悲しい思いをしたって方が、よっぽど大変なできごとだよ」

ネロは思わぬ言葉を聞いたので、ポカんとしてしまいました。トムはまた少し経ってから言いました。

「ネロが幸せになるためのペンなんだから、ペンがネロに悲しい思いをさせるのは、すごく変だよ」

ネロはさっきまでの悲しい気持ちがすっと消えていくのを感じていました。それと同時に、ふしぎな気持ちがネロの中にあふれました。べんきょうすること、学校へ行くこと、それに関して自分が必要な思いなのか、そんなこと考えたことがなかったからです。そして、お父さんとお母さんに喜んでもらうことを目標にがんばっていたのかも思っただけです。

少し考えてから、ネロはトムに聞きました。「トムはさ、なんでべんきょうしたり、学校へ行くと思っているの？」トムはぼんやりネロの顔を見ていましたが、車が原っぱのわきの道を3台ほど通り過ぎたところに言いました。

「どうしてだろうね。でも、学校へ行く途中には、毎日色んなちがうものがあって好きだし、みんなが教室で教科書のページをめくる音も好きだよ」

ネロはなんだかよくわからないなあと思いつつも、ワクワクしてきました。明日、学校へ行く途中の景色をよく見てみよう、みんなのページをめくる音に耳を傾けてみよう。そんなことを気にしたことは、今まで一度もなかったのです。

泥のついた手と、ひざとくつをはたいてからトムに言いました。

「今日はもう帰るよ。お父さんとお母さんは怒るだろうけど、ペンはなくした、ごめんさ

い。って言ってそれっきりにする」「そして」「今度一緒に帰ってもいいかい？」とトムに聞きました。トムは5秒くらいで「いいよ」と返事をしました。